

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 田中 純

本論文は、20世紀最大の建築家のひとりであるミース・ファン・デル・ローエの建築の意味を、単なる建築史的なアプローチではなく、表象としての「建築」という表象文化論的なアプローチを通じて、時代の重層的な文脈のなかで再定義しようとするものである。本論文は、分析の方法論を提示した序に続いて、ワイマール・ドイツ時代、ナチス・ドイツ時代、そしてアメリカ時代というミースの生涯の歩みに沿った八つの章から構成されている。その限りでは、これは、ミースに関するモノグラフィとしての性格を持つものでもあるが、しかしミースの生涯と建築作品を通年的に解説するものではなく、それぞれの時代において、ミース自身が単なる「建築」とは異なる営為として定義した「バウクンスト」という作品行為が、いかにして「時代」の政治性に対する「戦い」の表現になっていたかを、それぞれの時代のいくつかの特権的な作品ないし作品案の分析ならびにその作品（案）をめぐる種々の言説の分析を通じて読み解くという大胆な構想と緻密な構造をあわせ備えている。

こうして本論文の最大の特徴は、建築を「像」として読み解く、文字通り表象文化論的と言っていいその方法論にあり、審査会における議論もまずなによりもその次元に集中した。すなわち、ミースにおける「バウクンスト」の即物性の論理や決断主義、さらにはアメリカ時代のグリッドや偽装の構造を、それぞれの時代の政治状況に対峙しつつ、それを脱構築していく純粋に論理的な形式性において把握することの妥当性について、あるいは、そのようなシニフィエを欠いた純粋なシニフィアン出現のダイナミズムを分析する精神分析的な方法の限界設定について、論文提出者と審査員とのあいだに実りの多い議論が行われたが、それを通じて、本論文が企図した、ミースの建築が、それぞれの時代に特徴的な表象作用そのものを表象する構造を備えていること、また、そうした「表象の表象」という構造が近代の政治社会的な体制が共有する民主主義的なものの根源的な亀裂と相即するものであることがあらためて掘り下げられ、確認された。それは、同時に、建築という、これまでほとんど建築史的なアプローチによる研究しか許容されてこなかったフィールドに対して、表象文化論的な研究が可能であり、しかもそうした研究が、少なくとも「近代」という時代の政治的文化的な文脈を剔抉するためにきわめて有効であることが確認されたということである。その意味で、本論文は、これまでなかった研究の新しい地平を開いた画期的な業績であると判断される。

田中純氏は、今回、本論文のほかに参考論文として、「都市表象分析Ⅰ」も

提出したが、そこでは、田中氏はベルリンや東京という都市、あるいはヴァーチャル・アーキテクチャーや都市写真のなどまことに広範で多様な主題を取り扱いながら、しかし本論文と同様に、なによりも「像」という根本的な問題設定から出発して、現代の都市の「無意識」の分析を行っている。すなわち、ミースという個人を通して行われた本論文の歴史的な研究そして参考論文においてその最初の成果が発表された都市空間への同時代的な分析研究という互いに直交する二重の仕事によって、いわば都市と建築の表象文化論を完全に打ち立てたと言えることができる。

もちろん、審査の過程においては、このきわめて挑発的でもある論文に刺激されて対抗意見が出されなかったわけではない。1929年のバロセロナ・パヴィリオンにおける対称性についての別の解釈の可能性、シーグラムビルにおける彫刻案の精神分析的な「回帰」のもうひとつの読み方、あるいはミース最後の作品である新国立ギャラリーの不安定性の異なる位置づけの可能性、などいくつかの問題点を取り上げられたが、これらは、なんら本論文の瑕疵ではなく、むしろ本論文が開いた解釈の地平の潜在的な豊かさを証言するものであったと言えるべきである。

以上の審査により、本審査委員会は、田中純氏が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。